

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	忍耐は、何を対象とし、どう働くのか : 辛苦の甘受
Author(s)	近藤, 良樹
Citation	HABITUS , 21 : 1 - 16
Issue Date	2017-03-23
DOI	
Self DOI	10.15027/42913
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042913
Right	
Relation	



忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

— 辛苦の甘受 —

近 藤 良 樹

(広島大学名誉教授)

1. 忍耐の範囲は、決めにくい

(同じことでも、耐えがたく思う者も、楽しいと思う者もいる) セミの鳴き声は、ひとによって、心地よいこともあれば、不快な騒音となることもある。現代音楽は、これに慣れた者には音楽であるが、そうでない者には、不快な騒音である。不快と感じている者には、それを聞くことが強制される場合、苦痛で、これには我慢・忍耐が必要となる。

同じ仕事でも、これを有意義と捉えてボランティアで率先してやるのなら楽しいことだが、無意味な奉仕活動と思っている者には、耐え難く、腹立たしいものになる。同じ汗を流す仕事であっても、そのひとがどうこれを捉えているかで、苦痛になることもあれば、楽しみとなることもある。それを苦痛と感じ、かつこれを続けるべきなら、忍耐のいることとなる。

(苦痛も忍耐も、真実は自分だけが知る) 苦痛は自然的には回避したり排撃するものを、忍耐は、しないので、その限りでは、苦痛に感じているとは見えないことになる。だが当人は、不快・苦痛なのであり、排除したいのである。この本心を隠し通すことに忍耐の持続がある。あたかも平気であるかのようにして、苦痛をもたらすものに対応する。苦痛もその甘受の忍耐も、その真相は、忍耐する者にしか分からないことになる。

主観内の苦痛であり忍耐であるが、その置かれた状況の有り様を見れば、そ

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

れが苦痛になることか、忍耐のいることかは、見る者自身の体験をもとにして、見当のつくことではある。だが、ひとごとに不快になる対象は異なる。苦痛に過敏か鈍感かでの違いも相当なものである。欲求は、とくに、各人の抱く内面的なものだから、外的な傷害による苦痛以上に分かりにくいこととなる。人ごとに、好むもの・欲するものは異なる。しかも、それを忍耐している者は、多く隠して忍ぶから、ますます欲求も忍耐も分からなくなる。

(忍耐の想像は自分を投影しがちで、誤ることが多い) 木枯らしの音を聞きながら暖かい布団のなかで、ふと、畳も布団もない時代のひとのことを思い、さぞ辛い忍耐のいる夜だったろうと同情する。だが、おそらくは、布団のない時代のひとは、ムシロなどをしいて(「ムシロのない時代の夜は、さぞ辛かったろう」と思いながら)気持ちよく横になっていたことであろう。現代でも、極貧の国々の庶民をみると、豊かな国の者はいたたまれなくなる。どんなにか惨めで辛いことであろうかと感情移入するが、貧困の国の庶民は、おそらく、いたって元気である。貧困が生まれながらの環境で、他と比べる機会がなければ、これを苦にすることは少ない。

ひとは、適応能力に優れており、何でもすぐに慣れて平常のことにしていくことができる。苦痛の正座も、足が慣れると、むしろこれが快適となり忍耐など無用になる。苦も忍耐もこれをそとから想像する者と実際に体験している者とは、かなり異なった理解や感情のもとにあるということがしばしば生じる。(苦痛も忍耐も、人毎の過去と個性を語る) 快不快はいたる場面であり、それへの感じ方は、生きてきた過去に大きく関係したものになる。正座の生活をしてきたものは、正座に苦痛を感じることはない。座り机と畳の時代には、乗り物の座席にわざわざ正座する人をよく見かけた。そのひとの苦痛や忍耐を知れば、そのひとの過去が見えてくる。

苦痛のちがいは、生来のものである場合もある。聾者は、近所の騒音に悩む

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

ことはなく、騒音への忍耐はいらない。だが、聞こえないことは辛く、騒音に文句をいう者には知りえない辛苦を忍び続けねばならない。個人ごとに苦痛・不快のあり方がちがひ、それへの忍耐の仕方も異なる。何に苦痛・不快を感じ、何を忍耐しているかは、その個人の人生を語る。

なお、苦痛は、狭義には、感覚のそれを指すが、本稿では、忍耐の対象を示すものとして、苦しい辛いというような感情を含み、精神的な苦痛の苦悩や悶えなども含んで広義に使いたい。苦痛のほかに、類似の広い概念として、痛み・不快・苦・辛さ・辛苦などがある。精神的な苦痛は、辛苦がよさそうだし、広い範囲を網羅するものは不快であろうか。ここでは、苦・苦痛・不快・辛苦などの言葉を適宜に忍耐の対象として使っておきたい。

2. 忍耐は、自分の主観内の苦痛・辛苦を対象にする

(主観的には、忍耐の対象に曖昧さはない。自分の苦痛にする) 忍耐は、忍耐する当人の外から見ると、各主観の内のことで、苦の感じ方の個人差は大きいし隠すことも多くて、曖昧である。だが、主観的には、あいまいさはない。自分のうちに生じている苦痛・不快が対象である。苦痛なら、かりに幻覚であっても忍耐の対象となる。

「重い荷物に辛抱する」と、自分の外の物に忍耐するとはいう。だが、その外のものが不快・苦痛でなければ忍耐は無用である。いくら重くても苦痛でないのなら忍耐はいらない。忍耐は、苦痛があつてのものである。大けがをした場合、このけがに忍耐するのではない。生じた痛みにする。もし痛みがないのなら(戦場などではときにそうなる)、どんな大けがであっても忍耐無用である。あるいは、忍耐しがたいことになったときには、傷害や妨害はどうであれ、苦痛を無化できればよい。確実に忍耐無用となる。

(苦痛は、傷害を知らせ、自然的には排除したいもの) 生に傷害・妨害となる

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

ものには、苦痛を感じる。緊急に排撃等の対応をせよと自身に警告を発しているのである。感覚としての苦痛がなかったら、その身体は、傷だらけになり、無事には過ごせない。苦痛は生を保護する根本の感覚であり感情である。生に傷害になるようなものを自身のうちで育てたくはないから、苦痛の多くはそこからやってくる。苦痛は、外的な傷害・妨害の発生を知らせる。やけどしたら、痛む。これを察知してやけどの原因となる状態を回避する。その回避でやけどしないか、しても軽度のもので済むことになる。苦痛を回避・排撃することは自然的には大切な生保護の反応である。だが、ひとは、この苦痛を避けずに受け入れることがある。それが忍耐である。苦痛を受け入れることで、より大きな価値物獲得のできることを踏まえて、苦痛を甘受し忍耐する。

自然的には苦痛は、生の危機を知らせるもので、これは大切に気づかなくてはならない。忍耐は、苦痛を排除することなく、麻酔で無化するのでもない。その非常事態の信号を無視せず、あるがままに受け止め続ける。かつ、この苦痛に支配されず、逆に、これを手段に位置づけ自由にする。

(苦痛は、幻覚であっても、耐えがたい) 耳鳴りは、外にそれに対応する音波がない幻覚に属す。だが、これを苦痛とするひとは、外部の騒音と同様な忍耐を必要とする。いな、そこに苦痛の原因があるのなら、それから遠ざかれば忍耐無用となるが、うちにある幻覚の場合は、同じ苦痛でも逃れようがない。外的原因によるもの以上に忍耐が求められることである。

忍耐は、主観内の痛みにする。忍耐を象徴させることのある竹が、重い雪に折れることなく耐えていたとしても、それを忍耐とはいわない。それは、竹には苦痛がないと判断するからであろう。動物では、忍耐をときというが、迷うことがある。迷うのは、そこに苦痛があるかどうかということにおいてである。苦痛がある(かつ、これから逃げたり、攻撃的になっていない)と推定されれば、その動物は、忍耐しているとみなされる。

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

(直接的には、傷害や妨害に忍耐するのではない) 「妨害に忍耐する」という。だが、その妨害が苦痛でないのなら、忍耐はいらないであろう。かわいがっている子犬が、歩くのを足元で妨害するような場合、楽しくはあっても、忍耐などいらない。妨害に忍耐するというが、その妨げるものが不快で、この不快・苦痛に忍耐するのである。不快に忍耐するから、結果的には妨害にも忍耐していることとなる。妨害が不快でこの不快に忍耐し、したがって妨害をそのままに甘受して忍耐しておくということであろう。

傷害も同様で、かりに傷ついても、痛まないのなら、忍耐無用であろう。ひどい傷で大いに痛んだとしても、麻酔すれば、痛みを取り除けば、忍耐は無用となる。骨にひびが入るほどの傷害があったとしても、痛まないかぎり、忍耐はいらない。小さな傷でも、それが痛むのであれば、これには忍耐が必要となる。忍耐が問題とするのは、傷ではない。痛みである。

(忍耐は、欲求では、不充足の辛さにする) 忍耐では、外から生じる苦痛とともに、内から湧き起こる欲求に対しての、その不充足の不満・不快への忍耐もある。欲しいものを欲しがらないで辛いのを我慢する。反対に遠ざけたいいやなもの(反欲求)をいやがらないようにしてその辛さ・苦痛に辛抱する。

そとからの傷害が忍耐になるのは、それが苦痛・不快になったのことで、その忍耐は、苦痛を直接の対象にする。うちからの欲求の忍耐も、欲求自体に忍耐するのではなく、その抑制で生じる不快・苦痛にする。「息を止めて我慢する」というが、呼吸停止(呼吸欲求の抑制)ははじめは楽である。それが忍耐になるのは、息苦しくなり辛くなったのことである。忍耐は、欲求(の抑制)自体にはなく、やはり不快・苦痛にするのである。

3. 苦痛・辛苦は、この世に満ち満ちている

(苦と忍耐は、世に満ちあふれている) 客観的にはあいまいな苦痛・不快だが、

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

各人のもとでは疑いようもなく確かである。他人の苦痛は見えないから、安楽にみえる。が、自分の苦痛はすべて意識されることで、この世は(自分には)「苦界」だと捉えられることもある。苦が多ければ、この苦の甘受の忍耐も、当然、多く必要となる。他の規範である勇氣とか正義などに比して、圧倒的に多くなる。勇氣が必要となるのは、ひとによっては、一生でも片手で数えられるぐらいにとどまる。正義は、日本では個人の対処すべき規範として意識されることはまれといってもいいぐらいである。

だが、苦痛と忍耐は、日々、登場する。起床とともに忍耐ははじまる。もっと寝ていたいのを我慢して寢床を出る。通学や通勤もなにかと我慢・辛抱のいることである。学校・勤務先では、不快・苦痛になることは最初から避けているはずでも、いやなことが連続する。お腹がすいて辛くてもこれを辛抱して時間になるのを待たねばならない。トイレや喫煙も、しばらくの我慢を強いられる。苦痛・不快とこれの我慢・辛抱の忍耐と出会わない日は、まずない。この世は、苦と忍耐に満ち満ちているといたくもなる。

(忍耐は、有害と知らせる不快・苦痛を、あえて引き受ける) 自然は、快と不快によって、ひとや動物を動かす。その不快・苦痛は、危ういもの・有害なものを知らせ、苦痛をもってこれらの回避に向かわせる。火に近づくとその熱さに痛みを感じこれを回避するから火傷にならずに済む。だが、苦痛を感じない者は、たちまちに火傷となり生はダメージを受ける。苦痛の感情がないとしたら、いたる場面に控えている妨害・傷害は気になることがなくなり、これらを回避・排撃しようとはしないから、早晚、生命自体が維持不可能となってしまうことであろう。

この苦痛排除の自然的摂理を、ひとの忍耐は、超越し、苦痛をあえて引き込む。苦痛を受け入れるということは、自然的には、有害なものを引き受けることに連なる。だが、ひとは、特定の苦痛や有害なものを引き受けることによって、

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

それを凌駕する有益なもの・価値あるものを獲得できることを見通して、苦痛を甘受し忍耐するのである。

(精神的生においても不快・苦痛は大問題である) 精神的生では、快は、ひとを動かす力としては小さい。それよりも各領域の目的となる価値物(お金とか名誉とか)の獲得がひとを魅了していく。しかし、不快の方は、精神的生でも重要なものになる。精神的生の不快・苦痛つまり絶望・悲嘆などは、価値ある物事の確保が拒絶されたり反価値物が押付けられた状態に抱くが、これらは、ひとを衝き動かす強烈な辛苦の感情である。

絶望・不安の辛苦(苦悩)は、その生に重大な災いの生じていることを語る。この辛苦を解消して穏やかな生を取り戻そうと、動く。そのこととなる間、精神的な苦痛を抱き続けるが、これに忍耐できない場合、絶望の苦悩から逃れるために、人生の肝要事を放棄したり、酒などの麻薬で苦痛を麻痺させたり、ときには生命自体を絶つようなこともする。だが、忍耐できる者は、この苦痛苦悶に耐えて、暗黒のなかに輝く小さな希望の光をめざし「待てば海路の日和あり」と生を堅持する。さらに、この忍耐は、個我自体を超越して、普遍・全体の世界を支えるものともなっていく。絶望や悲嘆・不安に耐え、自分を犠牲にして、家族や国家のために生きるというような、高邁な精神的な生を培ってしていく。

(快は短い、苦は、長く、かつ多い) 歯痛は、何日でも続く。耐え切れず歯医者に行く。抜歯すると、安堵の快を得られるが、この快は、短く、歯医者を出るころには、もうなくなっている。苦は長く、快は短い。高度の精神的生においても、苦痛は、自然世界におけると同様に、その個体の生を否定するもの・有害な物事のあるかぎりいつまでも続く。不安や絶望・悲嘆は人生の過半を占めることすらある。だが、快の方は、かげをひそめた些事になる。悲嘆は、愛するものの死の悲しみなど何十年でもつづくが、逆の快・喜びは相当なもので

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

あっても、翌日はもう続かないといってもいいぐらいに、些事で短い。楽は、ほんの夢の間であり、苦は、この世を圧倒している。

忍耐はというと、そうでなくても苦の多いところに、この苦を排撃せず甘受して忍ぼうと心がける。その限りでは、苦のこの世に、忍耐は、さらに輪をかけて苦を多く長く体験させることになる。苦界に自らが飛び込んでこの苦をたっぷりと味わうのである。が、忍耐は、この苦を引き受け、手段・犠牲とし、これを積み上げて、ひとを、快不快の自然世界のくびきから解放して、自由の世界へと飛翔可能とするのもである。

4. 忍耐は、苦痛・辛苦を、どう扱うのか—辛苦の甘受—

(忍耐は、辛苦を回避せず、甘受する) 忍耐は、苦痛を対象とするが、この苦痛をどう取り扱おうというのであろうか。苦痛・辛苦は、感性・個我の自然本性においては、これを回避し排除したいものである。苦痛・不快は、その生に傷害等の否定的なものが生じていることを知らせる感情で、これの回避の策をとれば、生は保護できる。だが、忍耐は、この自然的な大原則を否定して、逆に、苦痛をあえて受け入れる、甘受する。

忍耐の苦痛甘受の甘、「甘んじる」は、満足する方面は排除した否定的な意味に限定される。苦痛の受け入れを甘んじるとは、仕方がなく、やむを得ずということである。受け入れたくないのが感性・個我の本心だが、それでは、ことはうまくいかないので、あえて、やむを得ず、これを受け入れるということである。当然、苦痛・辛苦を感じる感性・個我は、これに抵抗し苦痛回避へと動き続ける。自己内でのその抵抗を抑制しつつの苦痛の受け入れが忍耐である。受け入れたくないという思いをおさえて、あえて、意志を押し通して受け入れるという甘受である。苦痛甘受を手段・踏み台にすることで大きな価値獲得となる(あるいは、マイナスの排除がなる)という目的・見通しをもって理性意志

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

は、受け入れを決断するのである。

(忍耐は、苦痛をかみしめ、苦痛の回避・排撃等の衝動を抑止する) 忍耐は、苦痛を忍ぶ。苦痛刺激のもたらす抑うつ・不安等の感情的重圧に向かい合い、身構え力み緊張しつつ、これを受け止め、持ちこたえ、耐える。自然は苦痛を避けるが、忍耐するひとは、反自然的に対応し、苦痛に対して無抵抗・受身に徹して、これを甘受する。忍耐と自然的反応(反忍耐)のプラス・マイナスを計算し、苦痛を穏やかに甘受する方が生のためと忍耐を選択する。

忍耐は、苦痛を排撃したいのを抑え、これから逃げたいのを抑える。激痛に直面すると、この苦痛から逃れることを最優先したくなるであろうが、忍耐は、これを抑止して、苦痛を甘受し続ける。苦痛をもたらすものには、カッとなり思わず手が出て、これを排撃したくなるし、絶望や悲嘆の痛みや生理的な激痛では、内に閉じこもり虚脱・放心状態ともなるが、忍耐する者は、理性意志を堅持して冷静な対応ができるようにと自己を保ちつづける。手も足もでない辛苦を前にすると、どうにでもなれと原始的に退行して合理的な思慮を捨て、騒ぎ立て衝動的な破壊・自暴自棄に走りたくもなるが、これを忍耐は抑圧して、平然・平静をよそおうのである。

(忍耐では、内面・本心は、そのままを温存している) 忍耐は、苦痛を受け入れるが、諸手をあげて受け入れるのではない。いやなのをあえて受け入れるのであり、苦痛・不快の本心をうちには維持していて、これを放棄することはない。表向きは苦痛を素直に受け入れるのだが、内面においては、これを拒絶しつつづけている。面従腹背である。忍耐している限りでは、苦痛を感じる自分を変えて苦痛と感じなくなるようにとはしない。欲求抑制の辛い忍耐では、欲求をなくすれば、忍耐など無用となるのだが、欲求自体は維持しつづける。好き嫌いの自身のありかたは、忍耐では、変えない。ニンジンを食べるのを我慢する者は、ニンジンが嫌いなことを変えるつもりがない。好きになったら、我慢

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

などいらないのだが、その嫌いという本心の変更を忍耐自体はしない。自分のエゴを忍耐はしっかりと維持・貫徹している。

ただし、忍耐しているとやがて、その苦痛・不快には慣れて来る。欲求が苦痛を通して変えられてもいく。ニンジン嫌いを変えるつもりがなくても、忍耐して食べていると、これにだんだん慣れてきて、平気になっていく。スポーツなどの練習では、辛い状態を維持し耐え続けておれば、忍耐をもって、しだいにそれが辛くなくなっていく。免疫ができ、抵抗力ができ、対抗できる能力が身についてくる。慣れて来ると忍耐が無用になる。

(忍耐しても、痛むものは、痛む。が、忍耐はそこに自由を実現する) 忍耐してもしなくても感じる苦痛にちがいはない。では、なんのために忍耐などするのであろうか。忍耐をしないなら、苦痛自体から逃げられることもある。逃げられないとしても、忍耐を続けて、たくさんの苦痛を受け入れることはないかも知れない。だが、ひとは忍耐する。

動物もときには忍耐する。動物は、複数の選択肢があるとき、より快であるものを選び、より大きな不快を回避する。したがって、小さい方の快欲求を抑制し小さく我慢し、あるいは、蜂蜜を堪能する熊がハチの攻撃を忍ぶように、より小さな不快・苦痛を忍ぶ。この忍耐は、基本的に快不快に動かされての選択であり、自然の営為の中での忍耐である。ひとは、当然こういう忍耐もするが、必要なら、大きな快を避け、大きな苦痛をとり、長く苦痛を保つという反自然・超自然的な忍耐をする。

ひとに固有の忍耐は、快不快を超えた目的(お金とか名誉など価値あるものの確保、反価値物の排除)を踏まえて、これのために苦痛甘受を踏み台・手段にする忍耐である。快不快への自然的反応から自由になった忍耐である。没理性の自然にしたがえば、快に惹かれ不快は回避するという方向に進む。だが、ひとの忍耐は、この自然的反応を人間的目的のために中断したり、方向転換さ

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

せる。苦痛甘受の忍耐を手段・犠牲にすることで、反自然・超自然の目的論的な展開を行う。自分の田に水を引くという目的のために、自然的には他へと流れているのを、自然に抗し堰きとめるという手段(苦痛甘受)をもって、流れを変え自由にするのである。

5. 忍耐は、苦痛の原因にどう関わるのか

(苦痛だけでなく、その原因にも忍耐するか) 忍耐は、苦痛にするが、苦痛はその原因をもっている。苦痛(すべて主観のうち)とその原因(多くは客観的なもの)は、原因と結果として一体的であるが、区別される。忍耐する・しないに際しては、この区別が必要になることがある。「忍耐はいやだ」というので苦痛を排除する場合、その原因までも排除するのは、ときに乱暴なことになる。手術は痛いから止めだということがある。だが、麻酔して苦痛をなくして、苦痛の原因(手術)は受け入れればいいのである。ここでは、苦痛とその原因は区別が必要となる。

手術で皮膚の腫瘍を切除するとき、苦痛に忍耐する。苦痛は、自然反応としては回避・排撃したいものになるが、あえて受け入れる、甘受する。皮膚の切開自体は、苦痛とちがって、排撃したいものではない。むしろ、手術は、散髪と同じく、享受であり、忍耐するようなものではない。それでも、苦痛が激しくなると、この苦痛には忍耐できなくなり、苦痛ゆえに、享受する手術が受けがたくもなってくる。ということで麻酔で苦痛を止める。すると忍耐無用となる。手術自体は、もともと歓迎していることで、止めないで済む。

(苦痛とその原因が一体的なものでは、原因は無視できない) 痛みは、それをもたらす痛いものごとに密着して現れていることが多い。痛みの原因となる物があって、痛い物となっている場合、痛みに耐えるのは、痛い物に耐えることになる。自然的にはそれが普通だろう。傷害をもたらす物が痛みを生じるので、

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

この痛い物から逃げて、傷害から逃れるのである。痛いからといって痛みだけをなくして痛い物は放置するというわけには行かない。麻酔をして痛みのみを回避する場合もあるが、一般的には、痛む物を遠ざける。

痛みをなくするには、痛む原因をなくすれば良い。逆の場合は、痛みの受け入れは、単純には、その原因も受け入れることであろう。熱い風呂では、その熱湯による皮膚の痛み到我慢するのだが、それは、熱湯(原因)をそのままに受け入れておくことである。忍耐しないのなら、冷水をもってうめるが、それをしないようにして、熱湯とその苦痛に忍耐する、「熱湯を我慢する」のである。ここでは、苦痛への忍耐(苦痛の甘受)は、苦痛の原因についての忍耐(原因の甘受)と意識されることであろう。

(目的実現のために、苦痛(の原因)を甘受する) 忍耐で苦痛甘受という反自然の選択を自らがするのは、これを受け入れることとなる利・目的を見越しているが故にできることである。苦痛ではなく、苦痛の原因となる手段を、目的実現のために選び受け入れる。その目的実現の手段・踏み台となるものに苦痛が不可避的に伴うということである。ここでの忍耐は、苦痛甘受を行うとともに、目的意識のもとで手段自体、つまり苦痛の原因にかかわる。

自然的には苦痛をもたらす原因は、排撃したいとしても、それを排除したのでは、目的が実現できない。目的をなんとしても実現したいと思えば、ひとは、この苦痛の原因(となっている手段)を受け入れることになり、苦痛を甘受せざるを得ないということになっていく。

(苦痛とその原因への三様のかかわり方) 苦痛の原因への忍耐のかかわり方は、一様ではない。三様のあり方が区別できよう。第一のあり方は、忍耐する苦痛の原因自体は、大いに好ましく受け入れたい場合である。この場合は、好ましいもので受け入れたいのであれば、忍耐ではなく、享受となる。苦痛のみを甘受、忍耐して、その原因は快く受け入れることになる。においの不快な美

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

味の醗酵食品を食べる場合とか、享受としての手術の場合がこれになろう。

二つ目は、苦痛の原因となるもの自体へのかかわりが快でも不快でもない場合である。苦痛を甘受するとき、この原因も受け入れるが、その受け入れは、不快・苦痛でないものの受け入れであれば、それ自体は(苦痛甘受の)忍耐ではないことになる。欲求(の抑制)の忍耐の多くはこれになろうか。空腹や尿意の苦痛への忍耐では、これらの欲求を好ましいとも嫌とも思うことなく、生じるがままに受け入れていることである。

三番目は、苦痛の原因となるもの自体がいやなことがらで、できれば排除したいという場合である。苦痛と忍耐の多くがこれになる。苦痛をもたらす元凶(原因)であれば、いやになるのが普通であろう。たとえば、虫にかまれてのかゆみ・痛みでは、原因(虫とその毒)も受け入れたくないものでこれも忍耐となる(手が離せない場合、蚊・ぶよの寄ってくるのを我慢する)。この三番目の場合、苦痛の原因自体が排撃したいいやなものなので、これ自体への忍耐ははじめからしないこともある。かゆみ(苦痛)は搔かず甘受(忍耐)するとしても、その原因(蚊や蝨、その毒液)については、甘受せず、これを追い払い叩き潰し、皮膚の毒は吸い出して排除する。

6. 結び(忍耐の定義)

(忍耐=辛苦の甘受)

忍耐とは、一言でいえば「辛苦の甘受」と定義できるであろう。

忍耐は、いやな物事を受け入れたり、欲求の充足(快)を抑制するなどして、そこに生じる苦痛(辛苦)を甘受することである。苦痛の受け入れ自体には、あえて無抵抗の受動に徹し、苦痛のもたらす抑鬱・嫌悪などの感情をそのままに受け止める。苦痛には、自然的反応として、これの排撃衝動、逃走衝動等が生じるが、忍耐は、これらの自身の自然を積極的に抑圧して、あえて苦

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

痛を受け入れる、甘受する。あるいは、苦痛・辛苦に打ちのめされて虚脱状態に陥ったり、自暴自棄になるようなことも抑制して、平静な理性意志の堅持に努める。忍耐は、辛苦甘受を犠牲的手段にして、価値ある目的の実現をめざす。辛苦に屈さずその甘受を諦めず、これをひたすらに忍び、持ちこたえ耐えつづける卓越した営為である。

ひとの忍耐は、個我の快不快の自然感情から解放された反自然・超自然の自由の営為になる。いやなことをいやがらず、ほしいものをほしがらず、したいことをしないで、これを抑えて、そこに生じる苦痛・不快を忍び耐える。苦痛から逃れようともがく自然的衝動を抑え、辛苦に潰され悄然・虚脱状態になっても己の理性意志を失わないように抑制して耐える。苦痛排撃の自然的衝動にとられることも阻止する。辛苦・激痛には、合理的で緻密な対応の余裕がもてなくなり、没理性の幼兒的振る舞いに退行し短絡的になって、わめき散らし無謀な攻撃をし自暴自棄的になってもくる。忍耐は、これらをしっかりと抑えて忍び、苦痛を穏やかに受け止める。ひとの忍耐は、苦痛や欲求(快)の自然の支配を脱して、これを超越して自由を確保する。目的達成まで、屈することなく諦念することなく、超自然・反自然的に苦痛を甘受しつづける。

(「忍耐」という言葉は、「忍ぶ」ことと「耐える」ことを語る) 日本語では、苦痛の甘受を「忍耐」という語で代表させるが、この漢字の忍と耐は、忍耐のあり様を大別して捉えた表現になりえているように思われる。辛いことを内に「忍ぶ」忍耐であり、外からの攻撃・妨害を受け止めてその外的な辛苦をじっとこらえ「耐える」という、二様の忍耐である。

うちに「忍ぶ」忍耐の代表は、うちから沸きあがってくる思い・欲求といったものの抑制になる。欲求不充足で不快になり時間とともに辛さがましてくるが、これをじっとうちに忍ぶ。欲求・思いを内に抑え込んで、そとに出ないように忍びつづける(≡「し退き、凌ぎ、し延ぶ」)。忍耐の忍の字は、「心」の中

忍耐は、何を対象とし、どう働くのか

で痛み(「刃」)を受け止め続けることを語ると見てもよからうか。忍耐は、苦痛を、あえて甘んじて受け入れて、うちにある(苦痛の回避・排撃等の)衝動を、ときには自棄的になり暴発しそうになるのを、しっかりと抑えて、忍ぶ。苦痛甘受を犠牲的手段にと忍びつつ、忍耐は、「肉を切らせて、骨を切る」。「骨を切る」目的をうちに忍び堅持して、忍耐持続のエネルギーとしていく。

忍耐は、忍び、かつ「耐える」。有害物の襲来によって生じる傷害は、苦痛となり、忍耐は、この苦痛を「耐える」。耐火煉瓦が外からの火を耐える(≒「断ち、立ち、絶ち」える)ように、外からの苦痛を、平静をよそおって耐え続ける。苦痛の原因と苦痛自体をしっかりと受け止めて、これから逃げたり、逆にこれを排撃することもしないで甘受して、じっとこらえ耐える。そとからの大きな力にゆがめられても折れず屈することなく持ちこたえ、耐えつづけるのである。忍は、内に向き心的であり、耐は、外向きで身体的である。辛くなると、忍は、目をつむり口を結んで忍び泣くが、耐は、目をむいて歯がみをし呻く。男女の別をいうところだと、忍は女性名詞で、耐は男性名詞になるということもできるであろうか。

(付記：昨年の本誌(“HABITUS”vol.20.)の拙稿(「忍耐論」)について、補足・修正したものをウェブ(<http://blog.goo.ne.jp/kondoyoshiki>)に展開中です。参照ください。本稿も、それに続けて掲載の予定です。)

What is the Object of Perseverance and how does it Work: Acceptance of Pain

Yoshiki KONDO

Emeritus professor, Hiroshima University

Perseverance and its object are different in each person. Perseverance is always related to pain and accepting pain. When perseverance is at work, people tend to hide their pain from others. Therefore, perseverance within others is not easily recognized in reality, and it is too difficult to define the existence of perseverance in one person simply from external markers. However, each person can clearly perceive their own pain. Thus, there is no ambiguity as to whether he or she is enduring pain: a person is definitely persevering through pain, even if the pain is a hallucination. If an individual feels no physical or mental pain after a terrible injury, then he or she is not persevering through any pain. Naturally, humans tend to avoid pain. We possess a well-functioning reflex to avoid external effects that could harm our lives. However, with perseverance, we can endure physical or mental pain to achieve a greater purpose (excluding those of anti-value). Perseverance consistently has a passive posture, without fighting against pain. When a person receives offense impulses and escape impulses in pain, with perseverance, that person can suppress these impulses and retain a calm manner. Perseverance is one way to achieve a world of freedom beyond (pleasant and unpleasant) nature.